



ワインをつくるということ

農花(のうはな)ヴィンヤード
岡本なるみ

まずは自己紹介



- 出版業界で編集者としてのサラリーマン生活を4半世紀ほど送ったのち、早期退職。現在、小諸の糠地で、ワインブドウを栽培。
- 今年初の収穫予定。ブドウ栽培者としてはまだ3歳児。
- 家族(夫と娘二人)のいる東京との2拠点生活中。
- 東京で大学講師、長野県東御市のヴィラデストワイナリーで庭師のアルバイト※などもやっています。
- 全国花育活動推進協議会認定「花育」アドバイザー。
- 日本ワインブドウ栽培協会で、HPやパンフレットなどを担当。

ここにいたるまで・・・

●なぜ、ワイン？

・・・（斜陽の雑誌版業界→コンテンツ制作の主戦場はWebへ）

40代なかば、人生後半戦をどう生きるか？

自分の軸が欲しい

地に足の着いた暮らし

酒好き

農業へのあこがれ

動物好きの次女にミニ動物園を作ってあげたい…

…居心地のいい場所を作りたい

植物好き
↓
畑や庭造り

絵を描いたり
モノを作るのが好き
↓
子供たちとクラフト
教室

バックパッカー
↓
農家民宿

→今やらないと
たぶん一生やらない

そんなとき、

千曲川ワインアカデミーの存在を知る

●玉村豊男さんの「千曲川ワインバレー 新しい農業への視点」
に感銘を受ける。

「…千曲川沿いの河岸段丘にある耕作放棄地をブドウ畑に変え、
ワイナリーやレストランが点在する 一大醸造地にしていく…」

●初の民間のワイン栽培醸造学校

「千曲川ワインアカデミー アルカンヴィーニュー」

2016年、2期生として入学。



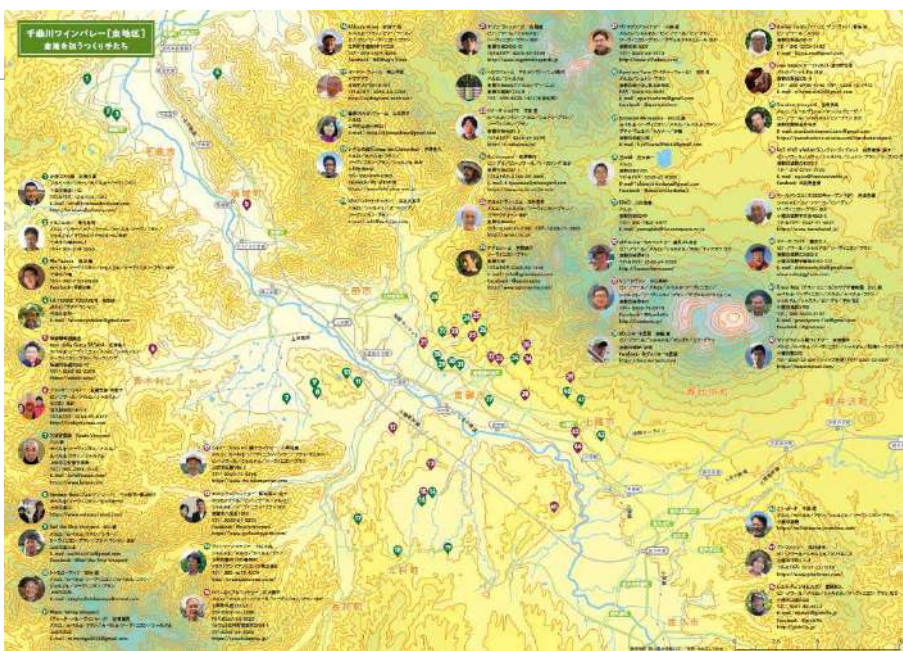
ワインをつくることを選んだのは、「生き方」そのものの選択だった

ちなみに、 千曲川ワインバレーとは

アカデミーは現在6期生。
100人以上の卒業生が巣立って
いった。
アカデミーができる前からある老
舗ワイナリーも含め、現在では40
以上の生産者が集う。

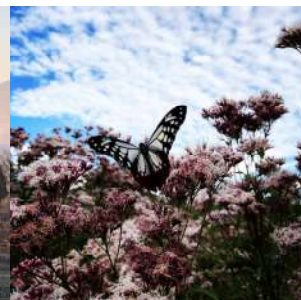
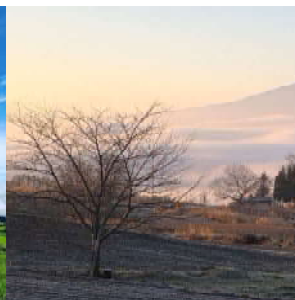


鹿取りゆき監修「千曲川ワインバレー生産者マップ」
日本ワインブドウ栽培協会 ブランドデザインワークスチーム



小諸・糠地と出会う

会社員時代にネットで見つけた理想の古民家物件が、糠地にあった。
糠地地区を牽引する生産者・池田さん(テールドシエル代表・
小諸ワイングローブズ倶楽部主宰)との出会い。



3つの柱

会社を辞めて準備したこと

自家製ワイン

2017年 杉並の区民農園
でブドウ苗を育てる
2018年、紆余曲折あって
やっとお借りできた小諸の
農地で、ぶどう畑を始める



花育と フラワーワーク

2017年～
オランダ式フラワーアレンジ
2018年
花屋のネットショップでバイト
植物画 寄せ植え リースづくり



植物を 育てるのが 好き



庭造りの技術

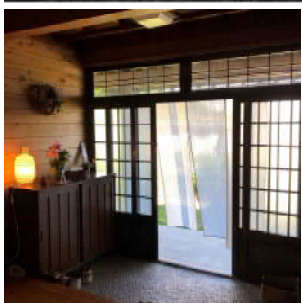
2017年、多摩総合職業能力開発
センター 造園土木施工を学ぶ。
(作庭、剪定管理、コンクリ・レンガ
施工、CADなど700時間)



自分にとって、人が集う理想の場所 「農花(のうはな)」 WINE & FARMSTAY

糠地地区の 魅力

もともと農家民宿の
盛んな場所
里山の暮らし、蝶々の里、
そば、
菜の花畑、
ワインの里...



「農泊」体験や、
クラフト体験が
できる場所にす
べく準備中...



ぶどう栽培について

2018年 杉並で育てた自作苗、購入した苗、合わせて330本を植える

2020年 現在は30アールに530本ほど

品種) 赤 カベルネフラン中心

白 シャルドネ、ミュラートゥルガウ、ソービニヨンブラン、ケルナー、
バカスカ、プチマンサン、フルミントほか

糠地は標高が高い(850メートル)。冬は藁巻き

藁をとったら、藁を長いまま、株間と株の周りに敷き詰める

畑の下草には、窒素固定効果のあるマメ科のシロツメクサ、ヘアリーベッチ、クリムゾンクローバー

雑草の抑制が目的だが、春先からオオイヌノフグリ、タンポポ、ヒメオドリコソウ、ヨモギ、フキ、ノビエ、オニノゲシ、ギシギシ、カモガヤなどがどんどん生えてくるので、定期的に草刈りする(根は残る)⇒草マルチ



自然本来の力を生かしたい

土壌微生物が豊かな土を作る。共生菌を増やす

害虫を食べてくれるテントウムシの活躍

雑草の根っこが腐ってできる空洞や、ミミズやモグラの力で土の中を耕す

除草剤を使わない 不耕起 無施肥

薬の散布はできるだけ減らす(近くの有機畑の防除暦を参考)

マメコガネ、ドウガネブイブイは「テデトール」(手で取る)で退治



小さな畑だからできること

偉大なる先輩農家たちの 見よう見真似です

「わら一本の革命」で有名な自然農法の福岡正信さんが、「耕さず、草も取らず、肥料もやらず...」と提唱してからすでに半世紀以上がたつ。

「土壌の多様性」を守るためになにができるか？先人たちの試行錯誤から、とりいられること、とりいられないことを取捨選択し、自分なりにアレンジしてるにすぎません。

飼料用トウモロコシの畑だった、べたべたの粘土の畑。

1年目 ブタクサランド

2年目 ペンペン草ランド

3年目 たんぽぽ畑・・・だんだんミミズが増えてきました。



お金と時間がいくらでもあれば、日本中でワインの適地を探せたのかもしれない...
限られた条件ではあるが、

「その土地のあるべき姿」に返していく

フランスの庭師・修景家 ジル・クレマン

「できるだけあわせて、なるべく逆らわない」

草や木が自然の遷移の作用として移動していくことそのものを
庭としてとらえる→「動いている庭」

通路に実生で木が生えてきたら、通路を迂回する

→彼の造る庭は、つねに動いている



大切なのは、うまく手を抜くこと

「自然に逆らわない」というと、高邁な理想のようですが、、、

↓

いったりきたりの生活なので、手を抜けるところ抜く。

でも、住宅と畑に囲まれているので、周囲の農家ともうまくやっていきたい

(周囲は農家の大先輩だらけ。草刈りはもっとちゃんとやらねばだめ、と怒られる。

雑草が繁茂すると、迷惑がかかる)



すべては「落としどころ」を探す旅 (人生もそう?)

最近ようやく分かってきたこと(←遅い)

子育ても、植物育ても、基本「放任」です。

→「自分で生きる力を育てる」

とはいえ、ジル・クレマンの「動いている庭」のようにはいかない
「放任」といっても、高温多湿の日本では、
庭造り、畑も、シメるところはシメないと

手を抜きつつも、調和を保つには、コツがある

これから10年くらい、そのコツ探し？



「聞く」と「やる」のは大違い

栽培していると、成長ステージに合わせて、わからないことが次から次へと出てくる

- へんな葉っぱ...これはなんの病気？
- 品種によって、枝の伸び方がぜんぜん違うが、副梢をどう管理する？
- 剪定するときの枝の選び方...

→

松本で開催される長野県の栽培セミナーに参加

長野県栽培プラットフォームに葉っぱの写メを送って確認

小諸ワイングローブズ倶楽部の勉強会で先輩農家に聞く（→子育てと一緒に）

先人たちの知恵を編集して使う→ 醸造も一緒

今は目の前のブドウを元気に育てるだけで精一杯
醸造はプロフェッショナルに委託 →テールドシエルさん
できるだけ「土地に寄り添って」ブドウを育てることが今の目標

2020年9月24日
3年がかりで育ててきたブドウ
が実り、初収穫を迎え、
無事ワインを仕込みました！



2拠点生活といっても...

昨月は、コロナでなかなか長野に行けませんでした...



「インバウンド」重視だった観光産業は変わっていくかもしれない。でも、リモートワークのインフラの飛躍的発達により、地方の価値は違う意味で上がっていく



人間としての本当の豊かさ、生きる強さ、創造性
⇒「自然と近くに生きること」によって育まれる

(自分の活動が、完全移住は難しくても、都会から地方への人の流れのきっかけづくりの一助になれば)

まとめ

- 編集の仕事、雑誌作りの仕事は天職だと思うくらい大好きでした。雑誌文化の最後の輝きの時期を、編集者として過ごせてよかったと思っています。
- 一方で、紙媒体がオールドメディアと呼ばれるようになり、メディア産業が急激に変わりつつある中、どうやって新事業を起こしていくのか、新聞社で仕事を続けることに限界も感じました。
- 若いころ、バックパッカーとしてヨーロッパを歩き回って、旅先で親切にもらってきたので、いつか、自分もゲストハウス、人がやってくるふるさとのような場所づくりをしたいと思っていました。早期退職は、退職金の上乗せがあったことから決心しました。
- 「子どもの学校は」「老親が倒れたら」とか、「やらない」理由はいくらでもありました。でも「今やらないと後悔する」、と始めてみると、運が開けていくものだと思います。
- 夫や子供たちを犠牲にして自分の夢をなすとげる、というつもりはさらさらなかったのですが、家族の協力がなくては、ここまでこれませんでした。感謝です。
- ブドウづくりを通して、東京で勤めていただけではわからなかったこと、日本の農業や中山間地の過疎化の問題にふれ、東京の特異性などを客観視できるようになり、複眼的な視点を持てるようになったと思います。残りの人生は、ブドウを作りながら、次の世代のためになるようなことをゆっくりとしていきたいです。

お話を聞いてくださり、ありがとうございました。



農花
NOHHON

